

巻頭言

中部陪会理事長

安村 仁志

主の聖名を賛美します。中部陪会の働きの一つである「会報」を続いて発行できますことを主に感謝いたします。

文豪トルストイ(1828-1910)は、一般的に言う50歳頃の“回心”のあと、民話風の作品の創作に取り組み、丹精込めて20篇ほどの作品を残しました。最初の作品は『人は何で生きるか Чем люди живы?』で、1881年(53歳)1月に着手し、「民衆自身の言葉で、民衆自身の表現で、単純に、簡素に、わかり易く」に基づいて推敲を重ね(33通りの草稿が現存、なんと1年もかけて完成させました。以後発表された作品の一つに、『卵ほどの大きさの穀物』(1886、Зерно с куриное яйцо)があります。短いものの、大げさにいえば文明論的な作品です。簡単にご紹介します。

あるとき子どもたちが谷間で、まん中に筋のある、鶏の卵ほどの穀粒を見つけた。通りがかりのものが買い取って町へ行き、珍品として王さまに売り渡した。王さまは賢人たちを集めて、それが何か調べさせた。賢人たちには答えが見つからなかったが、たまたま飛んできた鳥がつついたことで、卵ではなく穀粒であることが分かったので、そう王さまに伝えた。王さまは、こんどは、いつどこでそんな穀粒ができたか調べるように命じた。賢人たちは書物などでいろいろと調べたがやっぱり答えが見つからず、“百姓どもにたずねてみるより仕方ありません”と言った。そこで、王はうんと年寄りの百姓を連れてくるように命じた。年寄りの百姓が来た。青い顔をした、歯の一本もない老人で、二本の杖にすがってようやく入ってきた。耳も聞こえにくかった。その老人は「分からない」と答え、親父なら知っているかもしれないと言った。親父が連れて来られた。彼も杖にすがってきたが、1本だけであった。耳も息子よりよく聞こえた。答えは、自分にはわからないが、親父の時代には、今よりずっと大きな穀粒ができていたと聞いたことがあるので、親父に聞いてみるのがいいでしょうというものだった。親父が連れてこられた。そうとう年をとっているはずの、その親父さんは杖もつかず、目ははっきりしており、耳もよく聞こえ、口もしっかりとしていた。彼は知っていると言え、説明した—自分たちの時代には、穀物売るとか買うとかというような、そんな罪なことはなかった。金なんてものは誰もしたものはいなかった。穀物なんか、誰のところにも、ほしだけあった。自分の畑は、神さまの地面だった。土地は誰のものでもなく、自分のものというのはただ、自分の働きということだけだった、と。王さまは尋ねた。“では、どうして今はこういう穀物ができないのか。お前が孫よりも、子よりも元気なのはなぜか”、と。親父の答えはこうだった。“人が自分で働いて暮らすということをやめてしまったからでございます。そして他人のこと

ばかり羨ましがるようになったからでございます。昔はくらしかたがすっかりちがっておりました。昔は、神さまのみこところどおりに暮らしておりました。自分のものを持つだけで、人のものにまで目をくれるようなことはなかったのです。

この物語には、少なくとも三つのパラドックスがあるように思います。①“賢人”と呼ばれる者の無力さ—学者たちは学問上の経験・知識に立って謎解きをしました。が、解けませんでした。研究には基づいているものの、実地を知らない知識の弱さに直面せざるを得ませんでした。②子、親、祖父の順で登場する三人の老人が、年をとっているほど元気だということ—われわれの社会は「超高齢社会」に達していますが、その高齢者が生まれ育った時代はずっと物質的には貧しく、食生活も貧弱だったはず。それに対し恵まれた環境に育ったはずの世代が逆に多くのストレスを抱え、疲れ果てているという現実です。③三人の老人の生活環境と幸せの関係—時代をさかのぼるほど原始的、非合理で、生活環境もずっと不便だったはずなのに、のびのびと自由に生きていたということです。

これらからいろいろなことを考えさせられます。特に、大地震、大津波、そして原発の大事故によって大きな被害を受けた今日です。「想定外」ということばがずいぶんと使われましたが、このことばほど人間の知識、それに基づいた予測・計算の弱さを象徴しているものはないのではないのでしょうか。人間は努力を傾注して、倦むことなく便利さを追求してきました。それによって“労”の多くが軽減・回避されるようにし、合理性も追及してきました。しかし、それが私たちに“独りで何でもできる”ようにしたがゆえに、人と人の関係の希薄さを生み、“労”に伴われる“苦”とともに得られる“歓び”を奪ったり、虚ろなものにしてきたように思われます。そして真の幸せを感じられなくしてきたように思われるのです。

こうしたとき、聖書に示されている神さまからの福音を信じ、それに基づく救いに与った恵みに生きるものとされた私たちキリスト者、また聖書・救いの真理をより深く知る営み、それを広く伝えんとする働きに加えられている者として、どうなのだろうかと問われる思いがいたします。つまりは、私たち自身こうしたパラドックスの中に組み込まれていないだろうか—福音に生きるはずの者が物語の賢人たちのように、その福音が硬直したものになって現実の問題解決に生かせなくなっているのだろうか、日々現実の生活に相對しながら生きることから遠ざかっていないだろうか、それゆえに“頼りない”存在になっていないかなど問われる思いがいたします。また、物語の老人たちのごとく、疲れ果て、先輩たちより“年寄りっぽく”、“弱く”なっていないだろうかとも思われます。さらには、便利・合理性を追求するあまり人間にとって本来大切なものを失っていく社会の動きに“麻痺”してしまい、そこに現れている問題性に十分な問いかけを発すること、聖書のメッセージを有効に示すことを怠っていないだろうか、とも自問せねばなりません。

トルストイは『芸術とは何か』という作品の中で、「芸術とは、人が己に起こった最高、

最善の感情を他者に伝えることを目的とする人間の活動である」と述べています。“芸術”の部分を“福音宣教”に替えて読んでみればどうなるでしょうか。伝道に携わる者は、自身のうちに起った最高、最善の、恵みによる喜び・幸い・力を他者に伝えることとなるでしょう。トルストイは、独自の世界観・人間観に立って、芸術活動が“頭だけの”、経験に基つかないもの、小難しいものとなることを否定し、地に足をつけた、誰にでもわかる、生きたものでなければならないとしたのでした。

昨年の大震災、大津波による原発の事故は、一過性でなく向後何十年にもわたって影響を受け続けなければならないものでしょう。文明的な問題でしょう。その意味では今、福音、福音宣教が問われているともいえましょう。実際に被害を受けた人たちへの助け・配慮と同時に、福音に生きる者として福音が今日もこれからも、現実に“生きて働く”、“力ある”ものであることを身をもって大胆に伝えいくものとされたいと思います。神学研究の営みもあくまでもその範囲の中で続けていきたいものです。

